

北海道の **ひがし大雪アーチ橋友の会**

近代化遺産を守り、活用する

※1 地域にある近代化遺産を守り、活用していこうと、NPO認証法人取得に動き出している団体があります。地域住民、研究者、町外のファンなど、さまざまな人たちに支えられてNPO法人化を目指す、ひがし大雪アーチ橋友の会取材しました。



ひがし大雪アーチ橋友の会の事務局長を務める上士幌町在住の角田久和さん

※1 近代化遺産
1993年に重要文化財に新たに設けられた種別。これにより近代の土木施設や産業施設が、国の重要文化財に指定される道が初めて開かれた。同年、群馬県碓氷峠にあるれんが造りの鉄道アーチ橋群と、秋田県藤倉水源地の水道施設が、国の近代化遺産の重要文化財第一号に指定されている。

Report 3



11連のタウシュベツ川橋梁は、糠平ダム建設で水没。季節によって水位が変化し、見えない時期もある（写真提供：角田久和）

研究者たちの呼びかけで町民が奮起

一方的な要望だけでなく、提案型で保存を可能に

上士幌町にあるコンクリート造りのアーチ橋梁群が注目されるようになったのは、1997年秋に糠平で北海道産業考古学会主催のシンポジウムが開催されたことがきっかけです。

アーチ橋梁群とは、国鉄旧士幌線跡にある鉄道橋群で、最盛期にはこの辺りに66もの橋が架設されていました。既に撤去されたものもありますが、現在も士幌線跡の所々に、朽ちたコンクリートのアーチ橋を見ることができます。

近代に造られた鉄道橋は、明治期はれんが造りアーチ橋か、れんが橋脚と鋼桁橋、その後は、コンクリート橋脚と鋼桁橋のコンビが一般的であることに対して、上士幌町にあるアーチ橋は、コンクリート打ち放し、さらに、四連、五連などの多連式のものがあり、また、群をなして残っていることで、近代化遺産として価値が非常に高いと、研究者の間で注目を集めていました。

ちょうど、そのころ、旧国鉄清算事業団の解散に伴う資産処分の問題が表面化していました。何もしなければ、貴重なアーチ橋が解体されてしまいます。研究者たちが糠平でシンポジウムを開催したのも、文化的な価値があるそのアーチ橋群を残せないか、そのためには地域の人々の活動が必要だという思いがあったからです。

シンポジウムに参加した町民は、自分たちのまちにある貴重な遺産の存在に気付き、行動を始めます。それ以前に、上士幌町では、まちの宝探しをしようという活動を行っていました。アーチ橋は、宝探しのなかでも候補の一つとして上がっており、研究者から評価を得たことで、アーチ橋に対する町民の注目度は高まりました。そして、町内の有志らが集まり、同年11月に「ひがし大雪鉄道アーチ橋を保存する会」が発足されたのです。

保存する会では、まず保存のための署名活動と、会員の募集、そして活動資金集めの募金運動を開始しました。その結果、6,000人余の署名を集めることができました。また、帯広市などで、アーチ橋の写真展を開催したり、近代化遺産の活用と保存を研究協議する全国組織「全国近代化遺産活用連絡会議」でも署名を集めるなど、全国に向けて啓蒙活動や情報収集の場を広げていました。

当初、町としては、取得後の維持管理など、リスクを考慮して、取得については、必ずしも積極的ではありませんでした。そこで保存する会では、町議会あてにアーチ橋取得の請願書を出すなど、地域内での理解をさらに深める活動も行いました。

それと並行して、行政に一方的な要望を出すばかりではなく、自主的な取り組みをしていこうと、取得を想定した保全活用策の提言書を提出します。

アーチ橋はたくさん数があるため、すべてを保存することは困難です。そこで、それぞれの橋を、文化的資産価値やアプローチのしやすさ、橋への思い入れなど、いろいろな条件で評価し、保存の優先順位を付けました。それぞれの橋の健全度や補修方法、さらには解体費と補修費を比較するなど、非常にきめの細かい提言書でした。

提言書の内容の多くは、専門知識を要するものでしたが、これらは研究者のボランティアで賄われました。それだけ、研究者にとって価値のあるものだということです。北海道大学、北見工業大学、北海道教育大学旭川校の研究者、さらには民間のコンサルタント会社など、研究者・技術者のネットワークが、大きな力になりました。

そして、6,000人余の署名、提言書など、地域の人々の熱意と行動が、町と事業団を動かすことになったのです。

事業団では土地を処分するとともに、橋などの構造物を撤去することになります。そこで、2億6,100万円の解体費相当額で、その作業を町に委託。町では、いずれは取り壊すにしても、すぐに行う必要はないため、その



1月17～20日まで、札幌駅前のビッグカメラで開催された写真展の様子

解体費を橋の保存基金として組み込みました。'98年9月に橋の保存基金条例が制定され、同月、事業団は解散、翌10月にはアーチ橋群を町で取得することが決定。町は、土地、橋梁、トンネルを取得し、日本でも珍しいコンクリートアーチ橋の保存が可能になったのです。

保存する会の設立後、1年という短期間で保存が決まったこと、住民・行政・研究者・民間コンサルタントなどの協力と連携、さらに事業団の理解と基金の設立など、アーチ橋保存の経過は、全国でもまれにみる好例として知られるようになりました。

なぜNPO法人を目指すのか

こうして「ひがし大雪鉄道アーチ橋を保存する会」の目的は達成されました。しかし、その後、取得した遺産をどう活用していくかが重要です。これだけの資産が上士幌町の財産になったのです。では、その財産をうまく活用していく主体はだれかと考えると、それはやはり町民自身ではないでしょうか。そこで、保存する会を解散し、'99年に「ひがし大雪アーチ橋友の会」を結成。結成時には、NPO法人化を目指すことを念頭におきました。

保存する会の会長で、現在は友の会の事務局長を務める角田久和さんは、「NPO化するのが目的ではなく、組織として法人化することをどう生かしていくのが大切だと思っています」といいます。ちょうど社会のなかでNPOの認知が高まった時期でもあり、また、友の会の活動には、法人のなかではNPOという形態が最も適していたこと、さらに取り組みやすさという点も、NPOを選択した要因です。

また、「NPOが社会的な信用の一つの基準になってきているように思います。行政や財団が民間団体に助成金を出していますが、それには、やはり法人格を持って信用力を付けておくことが必要だと感じています」ともいいます。

一方で、「そんなに急いで申請しようとは思っていま

せんでした。その前に体制づくりや人材育成、人を呼び込んだり、イベントを行ったり、NPO法人でなくても、任意団体でできることはたくさんあります。しかし、長い目で見て発展的な活動をやろうと思っているのであれば、やはり法人格が必要だと感じています」。

課題は事務局運営費の捻出

今年度中のNPO法人申請、そして認証を目指して活動している友の会ですが、任意団体でも活動できることは進めていこうと、現在もさまざまな取り組みを積極的に展開しています。

アーチ橋を見学する遠足、線路跡の草刈り、昨年末にはアーチ橋写真コンテストも開催し、74点の出展がありました。1月には、札幌でコンテストの入賞作品を展示した写真展を町の観光協会と共催。また、会報の発行、ホームページの開設、絵はがきやカレンダーなど、アーチ橋関連グッズの開発にも取り組んでいます。

友の会会員は230人ほどで、うち町内在住者は70人ほどですが、遠足には会員以外の町民も参加するなど、町民のなかでも、地域のものをもう一度見直していこうという人々が増えてきているようです。

昨年は、アーチ橋梁群が、次世代に引き継ぎたい有形・無形の財産として認定される北海道遺産となり、今後の取り組みに弾みをつけました。これを記念して、数年にわたってアーチ橋を撮影し続けていたプロカメラマンの西山芳一氏の写真集「^{※2}タウシュベツ」が刊行される予定です。この写真集の売上の一部は、会の運営費に充てられます。

町からの補助金や会費など、年間150万円程度の収入の多くは消耗品費や通信費などで消えてしまうため、今後は、事務局運営費をどう捻出していくかが課題といえます。しかし、今後NPO法人化することで、グッズ販売や観光産業との連携など、収益事業の幅広い展開が期待されます。

※2 タウシュベツ
タウシュベツ川に架かるコンクリートアーチ橋の名前。



アーチ橋のガイドマップなども作成されている

地域資源を長い目で育てるマスタープラン作り

旧土幌線は、十勝北部の農産物や森林資源の開発を目的に建設され、'37年に上土幌～糠平間、2年後に糠平～十勝三股間が開業し、'78年に廃線となりました。急勾配と急カーブが続き、本格的な山岳鉄道で、音更川の渓谷に沿って造られたため、たくさんの橋を造る必要があったのです。そこで、工事費をおさえるため、地元で採れる砂利や砂を使って造ることのできるコンクリートアーチ橋となりました。また、大雪山国立公園内にあることから、景観を損ねないために、姿の美しいアーチ橋が採用されたことが、記録にもしっかりと残っています。

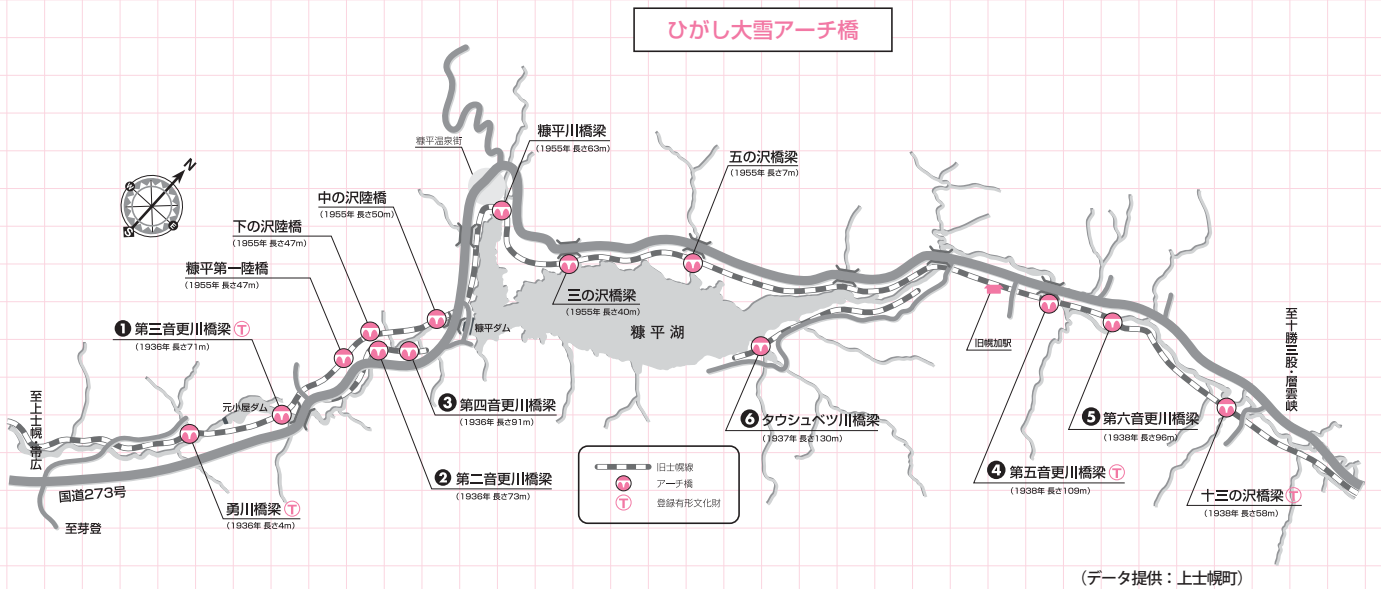
国内でも珍しいコンクリートアーチ橋梁群は、自然景観にも配慮して造られたもので、すでに旅行業者がツアーを組むなど、観光資源として注目が集まっています。

友の会では、今年度中のNPO申請、認証取得を目指して活動中ですが、来年度は利活用のマスタープラン作りをしようと計画中です。

「ツアー企画が持ち込まれるなど、徐々に認知されるようになってきたのですが、現地では、まだ、どのように活用していくか、具体的に系統的なまとまったプランはありません。看板や駐車スペース、トイレなどの整備を個別に進めていくと、統一感がなくなります。フィールドワークを重ねて、マスタープランをしっかり作っていきたいと思います」と角田さんはいいます。

一方、竹中貢上土幌町長は「これからは、NPOなど、市民の活動がまちの力を図るバロメーターになっていくだろうと思っています。NPOをまちづくりのパートナー、協力相手としてとらえていきたい」と、友の会のNPO化に向けてエールを送ります。

北海道開拓の遺産が、市民と研究者の協働作業によって残されたことは、北海道民としても誇らしいことです。また、新しい資源を、焦らず、地道に地域の魅力としてつくり上げていこうという姿勢で臨む友の会の活動は、今後のまちづくりの担い手としても大きな期待が寄せられます。NPOがまちづくりの核に。友の会の取り組みには、その可能性が見えるように思います。



NPO **ひがし大雪アーチ橋友の会**

住所 上土幌町5区 角田建築事務所内 (事務局)
 電話 01564-2-3358
 Home Page <http://www3.ocn.ne.jp/~arch/>
 会員 年会費 2,000円 (学生は1,000円)
 賛助会員 年会費 3,000円